



前号は、季刊誌である本誌の節目「春」号ということで、保育の絶対的な基盤である「安心」をテーマにした。今回の夏号は、そろそろ生活に慣れ自分を発揮し始める頃（保育的季節では「夏」）増え始めるだろう「葛藤」を特集した。

冒頭《View》の加藤氏は、発達心理学の見地から、「葛藤」とは子どもの自我の発達過程で四歳半頃から生じる「力」であることを明快に論じている。二歳頃の駄々をこねる子どもの姿はまだ「葛藤」しているとは言えず、四歳半頃になると、第二の社会的自我を統合しようとする力が「葛藤」となって経験されるという。「よくぞ葛藤できるようになった」というところか。保育の場では、子どもの側の葛藤と大人側のそれとが不可分にある。他児にいきなり突進しかけた瞬間、大人に後ろから抱きかかえられ腕の中で葛藤するOちゃん、そして、これでいいのかと葛藤する大人（川崎氏）。湯浅氏は、子どもの自発性と保育者としての自分の意図的働き掛けの間で、また同僚との共通理解の過程でも葛藤する。杉田氏は、倫理学、政治学の立場から「葛藤」をひもとく。どうやら、「葛藤」を人間本来の本性や未熟さに由来する悪者とする見方は古今東西共通らしい。その克服方法は、乱暴にまともると、個に埋没せず関係性や相互性を通して第三者的視点に開かれるように自己を高めることと言えそうだ。

「発達 development」という言葉の語源は、直線的な進展ではなく、こんがらがった糸玉がほぐれるイメージに由来するという。まさに、「葛藤」の状態からほぐれ、関係性を自ら制御しやすくなることが人の成長なのであろう。（H）